



令和3年 11月 25日

報道機関 各位

東北大学加齢医学研究所
スマート・エイジング学際重点研究センター

コロナに揺るがされた価値観 パンデミックは「自分」や「世界」の見方を変えた

【発表のポイント】

- 自分の価値や世界の公平性について一人一人が持っている根本的な価値観を「中核的信念」といいます
- 新型コロナウイルスの感染拡大によって、日本人の中核的信念が揺るがされていたこと、その揺らぎが抑うつや不安の強さと関連していたことが分かりました
- 感染拡大を食い止めるための対策を講じる中で、人の心理に生じる変化を置き去りにしないことが、感染症との戦いにおいて重要であると示唆されます

【概要】

COVID-19の感染拡大は、私たちの日常を一変させました。パンデミックが始まった頃の世界は、いつになれば「普通」の生活に戻れるのか分からず、先行きを予測することも、環境をコントロールすることも難しい状況であったと言えます。

予測や制御の困難な状況では、自分への自信や他者への信頼についての根本的な考え方を意味する「中核的信念」の再構築が必要になると言われています。東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング学際重点研究センターの松平泉助教、瀧靖之教授らの研究グループは、2020年7月に1,196名の日本人を対象としたWeb調査を行い、COVID-19の感染拡大が人々の中核的信念の揺らぎを引き起こしたこと、揺らぎが大きいほど抑うつや不安感も大きいことを明らかにしました。また、中核的信念の揺らぎの大きさを、1度目の緊急事態宣言発令中に感染対策に協力できていたと思う程度、感染対策への協力を負担に感じていた程度、感染拡大そのものを感じたストレス、感染拡大に伴う収入の減少で説明できることも明らかとなりました。この結果は、感染症との戦いにおいて、人の心理に生じる変化を考慮することの重要性を示唆していると考えられます。本研究成果は11月23日にHumanities & Social Science Communications誌に掲載されました。

【詳細な説明】

新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大は、私たちの日常を一変させました。いつになれば「普通」の生活に戻れるのか分からない、パンデミックが始まった頃の世界は、先行きを予測することも、環境をコントロールすることも難しい状況であったと考えられます。自然災害やテロ、重篤な病など、将来の予測や展開のコントロールが困難な状況において、人間は自分や他者、世界についての根本的な考え方をさえざるを得なくなると言われています。このことを「中核的信念」の揺らぎと言います(図1)。

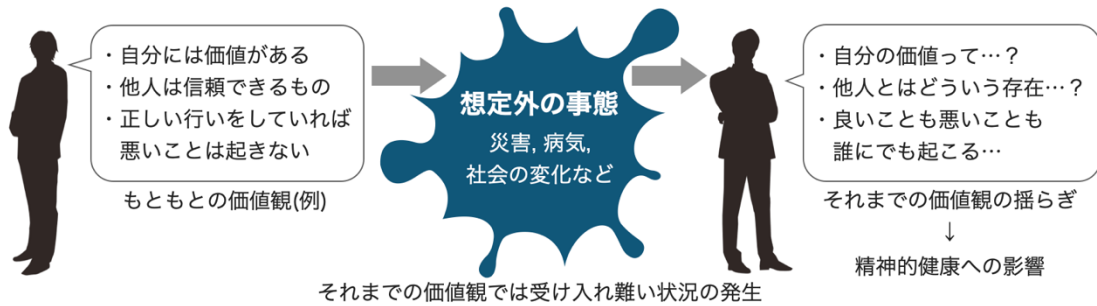


図1. 「中核的信念の揺らぎ」の概念図

欧米諸国のようなロックダウンが行われない日本では、感染対策にどのくらい真剣に取り組むかは個々人に委ねられていると言えます。このような社会において、COVID-19の感染拡大が人々の中核的信念に影響を与えたのか、またその影響が人々の精神的健康にどのように関与したのかは、明らかにされていませんでした。

東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング学際重点研究センターの松平泉助教、瀧靖之教授らの研究グループは、2020年7月に1,196名の日本人(30~79歳, 男女各598名)を対象としたWebアンケート調査を行いました。この調査では、COVID-19の感染拡大による中核的信念の揺らぎの程度についての質問のほか、年齢、性別、居住地、婚姻状況、子どもの休校の有無、感染拡大に伴う収入の変化、1回目の緊急事態宣言発令中(2020年4~5月)に自分自身が感染対策に協力できていたと感じる程度(協力達成感)、感染対策への協力を負担に感じた程度(負担感)、感染拡大そのものに感じたストレスの程度、そして、調査実施時点での心理的苦痛(抑うつと不安)の程度を問う項目を用意しました。

<中核的信念の揺らぎの程度を問う質問の例>

新型コロナウイルスの感染拡大があったために…

- ・人々に起きる事は人間がコントロールできることだと、自分がどの程度信じているかについて真剣に考えた
 - ・他の人との人間関係について、自分が信じてきたことを真剣に考えた
 - ・自分の将来への期待について、自分が信じてきたことを真剣に考えた
- …などの9項目に「0.まったくなかった」～「5.かなり強くあった」の6段階で回答する。

<感染対策に関する質問>

- ・緊急事態宣言が発令されていた期間、外出自粛などの感染対策にどれくらい協力できたと感じますか。

0 100
まったく協力しなかった とても熱心に協力した

- ・緊急事態宣言が発令されていた期間、外出自粛などの感染対策に協力することをどれくらい負担に感じていましたか。

0 100
まったく負担ではなかった 非常に負担に感じた

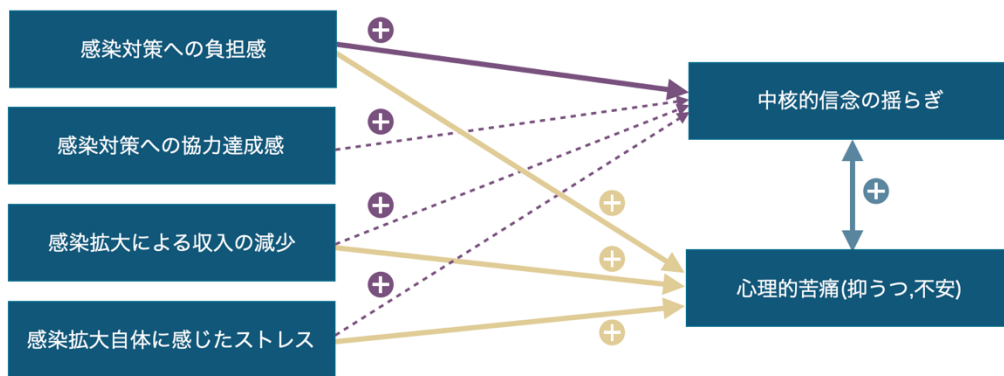


図2. 分析結果

+マークは矢印の片側の数値が大きいほど反対側の数値が大きくなることを意味する。矢印の太さは効果の大きさを表す。

統計解析の結果、感染対策への負担感・感染拡大に伴う減収・感染拡大自体に感じるストレスは、中核的信念の揺らぎと心理的苦痛の大きさに寄与することが明らかとなりました。また、感染対策への協力達成感も中核的信念の揺らぎの大きさに寄与しました。そして、COVID-19の感染拡大によって中核的信念が大きく揺らいだ人ほど、心理的苦痛を強く感じていることも確認されました。

この結果から、COVID-19の感染拡大が人々に生き方を問い直させる事態であったことが示唆されます。感染対策への負担感や協力達成感が中核的信念の揺らぎに寄与したことは、関連する国外の研究では見られなかった日本人独自の結果です。適切な感染対策の徹底は命を守るために必須であり、一人一人の自発的な対策行動が重要であることは言うまでもありません。ただし、それによる社会と暮らしの変化が人間の心理にもたらす帰結に、同じ時代を生きる者同士がより敏感になることが、感染症との戦いにおいて必要なことかもしれません。

【論文情報】

題：Core belief disruption amid the COVID-19 pandemic in Japanese adults

著者：Izumi Matsudaira, Yuji Takano, Ryo Yamaguchi, and Yasuyuki Taki

筆頭著者情報(氏名, 所属)：

松平 泉, 東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング学際重点研究センター

雑誌：Humanities & Social Science Communications

DOI:10.1057/s41599-021-00976-7

【問い合わせ先】

(研究に関すること)

東北大学加齢医学研究所 スマート・エイジング学際重点研究センター

担当1:助教 松平 泉(まつだいら いずみ)

電話:022-717-8824 E-mail:izumi.matsudaira.e4@tohoku.ac.jp

担当2:教授 瀧 靖之(たき やすゆき)

電話:022-717-8559 E-mail:yasuyuki.taki.c7@tohoku.ac.jp

(報道に関すること)

東北大学加齢医学研究所 広報情報室

担当:花岡 勝太郎(はなおか かつたろう)

電話:022-717-8496 E-mail:ida-pr-office@grp.tohoku.ac.jp